

1-7 カムイユカラ「エパウ」解説

語り手：貝澤とうるしの
聞き手・解説：萱野茂

萱野：私は一匹の黒狐でありました。

貝澤：男たって。

萱野：私の仲間たちが、アイヌの所へ神様と、まあ、maratto [宴の客] としてかな。神様として行くとたくさんのお土産をもらって帰ってくる、それを見て、私も一度だけでいいから、アイヌの村へ、お客として行ってみたいな。そんな風に考えておっても、私の住んでおるところは、ずーっとアイヌの住んでおる所から遠い遠い海を隔てた土地なので、何とか渡りたいと、そんな風に考えて、何日か何年か、過ごしておった。ある日の事、どうしてもアイヌの所へ行きたくなかったので、

貝澤：cikuni [薪] ないな、家に。

萱野：いや、あるある。草で舟を作ったと、それも少ない数でなく60艘の舟を作ったと。そしてそれにまた草で、たくさん人間を作って、それに乗りこませて、

貝澤：top aynu [竹の人間] だからおっきいのさ。

萱野：乗り込ませて、私も一緒に乗って、アイヌの村をさして漕ぎ出した。何日も何日も漕いでおるうちに、大しけにあって、もう右へ揺れ左へ揺れしておるうちに、草で作った舟なので、その舟はたちまち壊れてしまった。私も、どうかどうかしておるうちに、すっかりもう、舟も壊れちゃったので、海へ落ちて、どうか泳いだり流れたりしながら、

貝澤：ukirare ya hawe(?)さ。

萱野：波に打ち上げられるように、海辺へ浜辺へ寄せられた。そして、もう半死

半生になっているところへ、一人のアイヌの立派なおじいさんが出てきて、黙って私の方を見るので、何とか助けてほしいということは、その狐の考えは、アイヌの所へお客として行きたいんだということを言いたいんだけど、さっぱり言葉として言うこともできない。こう、鼻先をアイヌの村の方へいくらかビクビク動かしたら、「まあ、用事あるんならおれの後へついてこい」と、そのおじいさんが言いながら、歩き出したので、おじいさんの後をついて行った。

そうすると、浜辺のちょっと奥まった所で、大きな村、何十軒かの村があって、その村の一軒の家へ入って、私はすぐにその家の裏を回って、inawcipa [幣場] という祭壇の所へ行っておった。そしたら、今一緒に来た爺さんが、火の神様へ話ししたらしく、火の神様が出てきて、「お前がアイヌ部落に行きたいという理由もわかった。神様にするから、少しお待ちください。」と、火の神様が言いましたと。

それで私は黙って待っていると、家の中から弓と矢を持った人が出てきて、私を弓で射殺してくれた。そして、たくさんのたくさんのごちそうを、イナウやもちやたくさんのお土産をもらって、私は神の国へ帰ることができました。

それから、まあ見て私にたくさんのイナウをくれたアイヌの所へはたくさんのまだ授けものですから、狩猟に恵まれるように見守って、いつまでもいつまでも、私はアイヌの神様として、過ごすようになりました。と、黒狐が言いました。これは kamuyyukar [神謡] でした。

貝澤：ほんとに kamuyyukar [神謡] よ、これ。

萱野：kamuyyukar はいいね。おばさん。

貝澤：あれ、あの木はくべたらいいの。まるつきり火ない。